

1. はじめに：建国の父たちの退場とデモクラシーの台頭

わたくしはアメリカにおいてアメリカ以上のものを見たと告白する。わたくしは、民主主義の傾向、性格、偏見、情熱、つまるところ、民主主義そのものの真の姿を、アメリカにおいて追求しているのである（アレクシス・ド・トクヴィル『アメリカの民主政治』）。

◆1826年7月4日の死と独立宣言50周年記念日

- ・第2代大統領ジョン・アダムズ（フェデラリスト/連邦派）逝去（90歳）
- ・第3代大統領トマス・ジェファソン（リパブリカン/共和派）逝去（83歳）

◆19世紀前半のアメリカ社会

- ・第2次米英戦争（1812-1815年）によるイギリスからの経済的・精神的独立
- ・製造業の繁栄：就業人口の127%増加、産業革命の予兆（近代的綿工業）¹
- ・1820年代から北部の白人成人男性の普通選挙権が普及
- ・アンドリュー・ジャクソンの第7代大統領就任（1829-1837年）

⇒南カロライナ州の奥地の貧家に生まれ育ち、西部フロンティアの軍人として第2次米英戦争に従軍、ネイティブ・アメリカンの征伐によって有名となり、政界に参加。

⇒トクヴィルの評価「それどころか、現大統領は、連邦権力を拡張しようとはせず、この権力を憲法の最も明確な用語に準拠するように制限しようとしているとともに、連邦政府にのみ都合な憲法の解釈を決して認めない政党を代表している。ジャクソン将軍は、中央集権の首唱者として出現しているどころではなく、地方的なねたみを代表している人物である。彼を最高権力の地位に運んだものは「地方分権的」情熱である。彼がその地位において維持され、そして栄えているのはいつでも彼がこの情熱にへつらっているためである。ジャクソン将軍は多数者の奴隷である。彼は多数者の意志、願望、半ば隠されている潜在的本能に服従している。あるいはむしろ彼はこの多数者を神化し、そして自らをその地位におくようにあせっているといた方が適切であろう」²



2. トクヴィルが見たアメリカ

◆A. トクヴィルの年譜

¹ 江川良一「マサチューセッツ州におけるジャクソニアン運動」史林 51(3), 360-384頁, 1968年

² A. トクヴィル著, 井伊玄太郎訳『アメリカの民主政治 中』講談社, 1987年, 450頁

- ・ 県知事の三男として1805年に出生。パリ大学で法学を学ぶ。
- ・ 1827年、ヴェルサイユの臨時判事に就任。
- ・ 1831-1832年、アメリカに滞在。
- ・ 1835年、『アメリカの民主政治』第1巻、第2巻を出版。
- ・ 1838年、ヴォローニュの代議士に当選。1851年まで継続して就任する。
- ・ 1840年、『アメリカの民主政治』第3巻を出版。
- ・ 1849年、ルイ・ナポレオン内閣の外相に就任。
- ・ 1856年、『アンシャン・レジームと革命』を出版
- ・ 1859年、カンヌで死去。

彼の民主主義の根本的理念としての「地位の平等」にしても「フランス革命」の本質的理念にしても、これらの事実はすべて太古以来の一貫した持続的事実であるというのが、彼の一つの独創的哲学理論である。そして彼のこの事実の理解方式が、あらゆる学問に深く影響を与えているのである。フランス革命は過去との断絶を意味するものであるというのが、当時の（そして現代でさえもの）、一般の普通の見解であったが、彼はこの考え方に一種の革命をもたらし、太古以来のもの、ことに旧制度以来のもの、旧制度から持続しているものとみた³。

◆アメリカのタウンシップにおける自治

- ・ 「アメリカでは、共同体〔コミュニオン〕が郡以前に、郡は州以前に、州は連邦以前に、それぞれ組織されている」
⇒当時の「コミュニオン」とは英語でタウンシップ (Township) という2,000~3,000人の共同体を指す。トクヴィルがアメリカの政治体制の基底に見出したのが、このタウンシップにおける人々の自治体制であった。
- ・ 「アメリカの土の上に諸君が降りたつや否や、諸君は一種の混乱動揺のまっただ中にある自分を見つけることであろう。そこでは四方八方からわあっという騒音がわき起っている。諸君の耳には同時に無数の声がきこえてくる。それらの声の一つ一つは、何らかの社会的要求をあらわしている。諸君の周囲では、あらゆるものが動いている。こちらでは、ある地区の人々が教会を建てるべきかを討議するために集会している。あちらでは、人々は代表者の選択のために活動している。向うの方では、ある郡の代議員たちがみんなで幾らかの地区的な改良策を告げるために、急いで町に向っている。別のところには、道または学校の計画を討議するために自分たちの畑からやって来たある村の農民たちが集っている。幾らかの市民たちは、政府の方針に反対を宣言する唯一の目的で集会を催している。他の市民たちは、当局

³ 『アメリカの民主政治 上』, 82頁

者が祖国の父たちであることを宣言するために集合している。また他の市民たちは、酒酔を国家の害悪の主たる源とみなして禁酒の実例を示すためにおごそかに誓約しようとして集まる協会をつくっている」⁴

- ・「人々の愛情は一般に強い力があるところに向って注がれる。愛国心は被征服国では永続きしない。ニュー・イングランドの住民たちはその共同体に強く執着している。けれども、それは彼等がそこで生まれたためではなく、彼等のひとりびとりが共同体の一部を構成していて、共同体を統導しようとして払う苦勞に値するだけの自由な強力な団結を、この共同体のうちに見出しているからである」⁵
- ⇒トクヴィルは、人々が自らの地域的課題を自らの力で解決する意欲と能力をもつことを、民主主義の最大の可能性と考えた（民主主義≠多数者の支配）

◆多数者の専制という恐怖

- ・「アメリカ連邦で、ある人またはある党派が不正に苦しんでいるとき、一体それを誰に訴えたらよいのであろうか。世論に対してであらうか。多数者をつくりだすものは世論であって、これではだめである。立法団体に対してであらうか。立法団体も多数者を代表していて、多数者に盲従している。執行権力に対してであらうか。執行権力も多数者によって任命されている。そして多数者の受動的な手段となっている警察力に対してであらうか。警察力は武装した多数者にすぎない。陪審に対してであらうか。陪審は逮捕を宣告する権利を与えられている多数者である。判事たち自身も幾らかの州では多数者によって選ばれている。それゆえに、どのような不公平な、または不条理な処置が諸君に対してとられるにせよ、諸君はそれに服従しなければならないのである」⁶

⇒ハミルトン「歴史の教えるところでは、人民の友といった仮面のほうが、強力な政府権力よりも、はるかに専制主義を導入するのに確実な道であった。事実、共和国の自由を転覆するにいたった連中の大多数のものは、その政治的経歴を人民へのこびへつらいから始めている。すなわち、煽動者たることから始まり、専制者として終わっているのである」⁷

⇒「多数者の利益」は「公共の利益」ではない

◆地位の平等化とデモクラシーの台頭に伴う新たな社会問題

- ・誰もが同じ地位の社会＝人々は「誰でもない私」を求めるようになる（個人主義）

⁴ 『アメリカの民主政治 中』, 154 頁

⁵ 『アメリカの民主政治 上』, 137 頁

⁶ 『アメリカの民主政治 中』, 174 頁

⁷ A.ハミルトン他著、斎藤真、武則忠見訳『ザ・フェデラリスト』福村書店、1991年、5頁

⇒自らの小社会に閉じこもり（誰の世話にもなっていないという意識）、大社会の
圧政を放任する＝利己主義

- ・富への欲望＝経済関係のみが人間関係の基底となる
「市民たちがすべて互いに独立的であり、そして無関心で冷淡であるときには、金が支払われなければ、各人の協力はえられない。そのために富の使用が限りなくふえるのであり、そして富の値打ちも増加するのである」⁸

「富から生れる差別は、他のすべての差別の衰滅と減少とに、比例してふえてゆく」

- ・独裁者を望む民衆、社会への無関心という根本問題
「自分を自分で導く習性を全くあきらめている人々が、これらの人々を統導すべき人々を選ぶことに成功しうるとは、とても考えられないことである」
「自らの代表者たちと自らとに飽いて、うんざりしている人民は、より一層自由な諸制度をつくるであろうが、まもなく、唯一人の主人の足下に平伏することに再びなってしまうであろう」⁹

⇒ 「それ故に、われわれは未来については、心を挫折させて無気力にするこの種の軟弱な無為無能な恐怖ではなく、健全な懸念をもつべきである」¹⁰

3. おわりに：宇野重規『民主主義とは何か』講談社(Kindle版), 2020年

- ・「自分が所属する集団をどこにもみつけられない人々にとって、代議制は欺瞞以外の何ものでもありません」⇒多数者になれない「置き去りにされた人々」の不満
- ・「民主主義の本質は、市民が自ら問題解決にあたることで当事者意識をもつことにあります。自分たちの手で支えているからこそ、国や自治体に愛着がわき、それに貢献する意欲も生まれるのです。このような愛着や意欲もなしに営まれるものは、民主主義とは呼べないというのが、トクヴィルの信念でした」
- ・「トクヴィルは、人と人が結びつくのは技術だと考えています。『デモクラシー』に潜在する『個人主義』の趨勢により、人と人の結びつきは弱まり、個人は孤立に陥りがちです。これを避けるためには、日常生活において、人が他者と結びつき、他者とともに何ごとかを実現するための訓練の場が必要です」
- ・「それでも、アテナイにおいて民主主義は二〇〇年近くも機能し続けたことです。この間、アテナイは全ギリシアにおいて、もっとも豊かで、もっとも安定し、文化的にも実り多いポリスでした。(中略) 背景にあったのは、アテナイの人々がこの制度に深い愛着を抱き、その維持に努めてきたことです」

⁸ 『アメリカの民主政治 下』, 404 頁

⁹ 『アメリカの民主政治 下』, 564-565 頁

¹⁰ 『アメリカの民主政治 下』, 579 頁